

日本労働組合運動會

我國労働者の現状は先進國の労働者に比較して精神的に物質的に又た社会的に未だ及ばざるところ故事に違あらず。是れ我國因襲の久しきと工業尙ほ幼稚なるの致すところ故を以て此因襲を脱却して労働者の向上を圖らんとするは労働者の自覺により我工業の隆昌を期するの外あるべからず。或は現今の産業組織を破壊し改造するを以て途徑と爲すものなきにあらずと雖も、産業組織の打破は労働者とは資本家と云はず一國を擧げて混亂流離の中に投ずるものにして般途からず之れを露西亞の現状に見よ思ひ半に過るものあらん、是の故に我等は宏りに矯激の言行を取つて自ら窮地に陥ることを好まず我國家と社會の健全隆昌なる發達を庶幾し、和衷協同、生産と矛盾なき向上を圖らんとするものなり。今や世界を擧げて露國過激思想の侵入を防禦するに汲々たり、我國にして若し茫乎として爲すところなくんば或は恐る惡流滔々我労働界を侵し復た收拾し能はざるに至らんことを、現に我労働界に矯激の言を爲して煽動是れ事とする者あり、豈寧心に堪ゆべけんや。我等は飽くまで我労働者の地位向上を求めて止まざるを同時期に精勵努力、國家の生産を増大して以て自己の利益を擴張すべく又た國家を蝕毒する彼の惡流に對しては極力防禦に力めんことを、是れ我等の赤誠止まんとし止む能はざるどころ、即ち本組合を創立する所以、之を指して他にあらざるなり。

聲明

組合長 得富 太郎

(一) 精神上にも物質上にも労働者の向上は生産が本である生産は働かざるも夫れは、働かずして向上を希望するも夫れは絶対不可能である、向上を希望せんとせば働く、之れが労働者の原則である、若し之れに反して生産に伴はずして満足を求むる之れは破壊である、破壊は向上の道にあらざりて労働者の自滅である、同時に國家産業の破滅である

(二) 資本家の得べき收得も生産を本とした報酬ではなくてはならぬ、資本家が報酬の増大を得んと欲せば生産を増大にせねばならぬ、生産を増大にせんとすれば自然労働を尊重し又擁護せねばならぬ労働者を擁護することは即ち資本擁護であつて、若し資本家が労働者を無視するは即ち資本家の自滅であつて又國家産業の破滅と知らねばならぬ

(三) 本組合は自覺を以て本體とする、何と云つても自覺でなければ萬事駄目である、職に忠實と云ふことを資本家に忠實と思ふは間違ひで自己に忠實であると思ふべきならぬ、過激と粗暴と職に不

忠實は労働者の自覺である

(四) 本組合は輕率妄動を最も戒む、行はれ得ぬことを豪氣らしく捉へ來つて、大言壯語して見たり、無闇に世界の聲聞を輸入して、其研究もせず之れが實行を運動して見たり、そして労働者を煽動して、自己の職業を忘れて、妻子養族を餓死せしむるやうなことは絶對禁戒する積りである

(五) 本組合は修養を第一とするのである、何んといつても我國の労働者は幼稚である、歐米の夫れと比して及ばざることを遙かに遠い、故に何を理想しても我労働者の大部分は之を實現するの力が無い修養訓練、之れが労働運動より先立たねばならぬと信する

(六) 富は労働の蓄積である、我國労働者は修身労働者であつてはならぬ、又た孫子の末まで労働者であつてはならぬ、勤儉力行人格向上、二日も早く労働を脱すべきである資本家を攻撃するよりも自ら労働を蓄積して資本主に爲るべきであることを企望する

我組合員の修養

組合長 得富 太郎 述

我日本労働組合が、労働界にも参加せず又た多くの労働運動にも加はらず、別に一旗幟を樹て、大槪の場合に沈黙して居るのは、爲さるゝが爲めに爲さぬのである、或は三年暗かす飛ばず、所謂睡伏して居るのである、徒らに沈黙して居ては組合として有名無實ではあるまい、之れに就いては世間から兎角の批評もあらう、組合員も氣にして居らるゝこと、推測するので、爰に再び聲明し置く必要を感じた

元より我組合は無爲にして終るべきで無いことは申すまでもない、三年飛ばず暗かすとも限らぬが、去りとして大なる惡圖を抱いて今日に睡伏して居る譯でもない、騒ぐ腕は持つて居るのであるから、騒ぐべき必要に迫られれば、何時でも驚天動地の大活動はする、只我組合は輕率妄動と云ふことを最も戒めて居るのである、労働者であれば常に必ず騒がにやならぬと云ふ馬鹿な理屈は無からう、世の労働者は、五人集まれば忽ち資本家を攻撃し、十人集合すれば則ち産業管理を奪唱す

る、資本主攻撃もよろしい、管理權高唱も假りに結構だとして、日本の労働者はソコまで訓練された目的を以て騒ぐだけの信念があるか、否か、余を以て見れば我國の労働者は失禮ながら歐米先進國のその如くに、高遠な理想を目的として運動するまでの修養が出来ないと思ふ、信念なき運動は畢竟輕率妄動に過ぎない、騒ぐだけの事で何の勝利も見られぬ、多くは龍頭蛇尾で最後は四離滅裂、騒いだ意味が判らなくなる、近き例として足尾の騒ぎが丁度之れを證據立てて居るのである

何も足尾に限らぬ、從來我國の労働者の運動は皆安んずるものである、夫れは其苦で、我國労働者の現在の程度では、精神の向上問題に思ふべきこと、八時間制を叫んでも、賃銀削減を唱へても、夫れが修養された自己の信念から出發した真の叫びではない、只何者かの煽動に乗つて、意味も利害も判らぬまに騒いで見るので、最後が資本主から被首されて脚の圓めたるやう、遂に泣き出すまでの

ものである、之れが所謂輕率妄動、騒ぐべき見込みも無いに安んじて運動する、輕率妄動の文字は實によく字義を盡して居ること、と思ふ、こう云ふことであるから我組合は容易に騒がぬのである

若し我組合が、安んじて事を起し、社會や資本家に喰つて掛り、行はれぬやうな注文をして、揚録巻で騒ぎ廻り、其勢で同罷罷工もやるとして、夫れは誠に壯であり、快は快であるが、首を切られる幕と爲れば、周章狼狽、妻子は演壇に立つて「明日から食へぬ」と泣く、止むを得ず復職運動と一段男を下げ、それも叶はねば解僱手当増額の哀を請ふ、ソコナ淺憂な、ミシメな労働運動が組合員の好みであるか、どうか、又た世間が之れを見て何んと評するか、果して之れを堅い信念だと褒めるかどうか、我組合は決してソコナ馬鹿な真似などしては濟まぬ、斯く心得ておればこそ我々は忍んで沈黙して居るのである、其處で我等は靜かに信念を造るべく、修養をし、訓練をするのである

さて、修養とか訓練とか云つても、示威運動の訓練や、演説會でのお行儀を修養するのではない、足尾の騒ぎが、正々